令和３年度　自己評価・学校関係者評価

学校番号
2

岐阜県立岐阜北高等学校

1 学校教育目標	⑴ 知・徳・体の調和のとれた生徒を育成する ⑵ 確かな学力を身に付け、創造的思考力と主体的実行力とを併せ持つ生徒を育成する ⑶ 高い志とグローバルな視野を持ち、自身の夢の実現と地域社会の持続可能な発展に貢献できるたくましい実践力を備えた人間性豊かな生徒を育成する ⑷ 倫理観や規範意識に基づく社会性を育むとともに、他者を思いやる心に富む生徒を育成する ⑸ 健康維持や体力づくりを推進し、自他の生命を尊重できる生徒を育成する
2 現状の分析	⑴ 誠実で礼儀正しくスマートな生徒が多い。学ぶ意欲や規範意識も総じて高く、人間関係も落ち着いている。部活動への加入率も約９０％と勉強に偏らず、充実した高校生活を送る生徒は多い。生徒・保護者アンケートも分野において総じて８０％以上が肯定的な意見である。〇 ⑵ 進学重視型単位制高校として３年目を迎えた。１年次に英語、数学、国語で分割授業またはTT（チーム・ティーチング）による基礎学力の定着を図り、「進学指導重点校事業」（平成２９年度～令和３年度、県教委指定事業）を活用し、思考力や判断力を重視する大学入試改革(高大接続改革）に対応した進学指導体制を整備するなど、国公立大学(例年２００名以上合格）を中心に堅実に進路実現を果たしている。〇 ⑶ 「地域共創フラグシップハイスクール事業」（令和元年度～、県教委指定事業）を活用し、「総合的な探究の時間」等において、１年生は「地元岐阜の活性化のための方策」、２年生は「発展途上国の開発援助のための方策」をテーマに探究活動を進め生徒の視野を広げている。コロナ禍のため外部機関との連携に制約があったが、指導体制や学習内容の充実に努めている。〇 ⑷ コロナ禍の中で学校行事の運営方法の見直しや校則の見直しなどを生徒とともに進める中で、学校全体の安全安心、公共の福祉のためのルールやマナー、少数者への配慮などを学び、生徒が課題解決に向けて積極的に取り組んでいる。〇 ⑸ 新型コロナ感染症については、マスク着用や手指消毒、健康チェック、換気等の三密回避により全校的な取り組みで校内感染を防いできた。命を守る訓練(避難訓練)、交通講話、人権LHRやSOSの出し方のLHR、いじめ迷惑調査の実施など、学校は命を守ることを最優先にしている。〇 交通安全指導を年間を通して行い、大きな事故はないが、登下校時の自転車事故を完全に防ぐことは難しく、今後も継続的な指導が必要である。▲
3 学校の抱える課題	⑴ 優秀な生徒集団の中で、自己肯定感や目標を失う生徒もおり、彼らへの励ましや支援が必要。 ⑵ 進学への生徒や保護者の期待が高く、テストの点数や偏差値へのこだわり、塾への過剰な依存や大学受験最優先の価値観を持つ生徒が一部に見られる。 ⑶ 高い志や広い視野を持つために、実社会と接続した「社会に開かれた教育課程」が重要だが、地域と協働した活動の機会は十分とは言えず、教育課程への位置づけや連携のしくみづくりが必要。 ⑷ 集団生活のルールやマナーについて、学校が決めて一方的に示すのではなく、生徒たちがその意義や目的を考え、自ら改善していける機会の提供が必要。 ⑸ 心身に悩みを抱え、不登校や鬱傾向にある生徒は命の危険もあり、家庭や外部機関とも連携した支援が必要。
4 今年度の具体的な重点目標	⑴ これまでの歴史や伝統を踏まえつつ、新しい時代を切り拓く子どもたちのために本校が育成を目指す資質や能力を明確化し、教育活動を組織的・計画的に進めるための一貫した指針である「スクール・ポリシー」を示し、その趣旨を踏まえて教育計画を策定する。 ⑵ 進学重視型単位制高校として、個別最適化、ICT活用、対話的で深い学び、開かれた教育課程等をキーワードに、生徒保護者や地域の期待に応えられる教育課程を編成する。 ⑶ 地域や関係機関との連携を進め、地域の教育資源や人材を計画的に授業等に取り込むことで、生徒が視野を広げ、実社会との関わりの中で、より高い志を持ち、夢や希望を抱ける学びの体制や組織を整備する。 ⑷ 校則やルールを単に守らせるだけではなく、法が弱者を守り、皆が安心安全に生活するためにあることを理解した上で、課題があれば自分たちの手で改善し、より良い社会を創造するために、生徒が議論し発信できる機会を提供する。 ⑸ 心身の不調を抱える生徒に対し、校内のみならず外部機関（スクールカウンセラー、スクール相談員、県教委、警察、児童相談所、医療機関等）とも連携し、きめの細かい支援を組織的・継続的に行う。

年度目標			年度末 成果と評価			
5 評価項目 領域・分野	6 重点目標の達成に必要な 具体的取組・方策	7 達成度の判断・判定基準 あるいは評価指標	8 取組状況・実践内容 評価項目の達成状況等	9 評価 A･B･C･D	10 成果〇と課題▲	11 総合 評価
教科指導	(1) ・対話型、問題解決型の授業を推進する。 ・公開授業を計画的に実施し、授業改善を図る。 ・低学年時に基礎的知識、技能の定着を図る。 (2) ・各教科で探究的な学びを意識した授業デザインを行い、教科連携の研究を進める。 ・総合的な探究の時間を通して探究のスキルを身に付ける。 ・ＩＣＴ機器を活用した授業を推進する。 (3) ・組織間の連携を図り、生徒それぞれの状況の把握に努める。 ・生徒学習指導委員会を実施し個別の対応を検討する。 ・コース科目選択の説明会や懇談を通して、履修指導を行う。 ・年間を通して基礎学力講座を実施し、知識技能の不足を補う。	(1) ・生徒による授業アンケートの分析 ・考査や実力テストの分析 ・教師間の相互授業評価 (2) ・取り組み状況の分析 ・生徒による授業アンケートの分析 (3) ・履修登録状況の分析 ・個別対応が必要な生徒への指導は適切であったか ・生徒アンケートの分析	(1) 授業アンケート分析することで授業改善が行われた。 計画的に公開授業を実施し、相互に意見交流ができた。 (2) 探究的な学習を意識し、協働的な活動を取り入れた授業が増えた。 多くの授業でＩＣＴ機器の活用が進んだ。 (3) コース登録の説明会を行った。 必要に応じて生徒学習指導委員会を開き、個々の学習指導について検討を行った。	A A B	(1) 対話型や問題解決型の公開授業が実施でき、授業改善が進んだ〇 考査や実力テストで学力別の分析は課題である▲ (2) オンラインでの学習支援で全体のICTのスキルがアップした〇 探究的な学びの手法を取り入れた授業が多くあったが、明確な学力の向上は見られなかった〇▲ (3) コース説明会は実施したが、科目履修の際も必要性を感じた。また、保護者との情報共有が必要である▲ 問題を抱えた生徒に対して指導について共通理解を図ることができた〇	A
進路指導	(1) 「キャリアパスポート」「ポートフォリオ」を活用し、学びのＰＤＣＡサイクルの確立を図る。 (2) ・系統別進学説明会、大学の出前講座等を企画し、生徒が主体的に進路決定できるよう支援する。 ・補習、土曜講座、集中学習会を実施し、生徒の学力向上を支援する。 (3) 進路講演会、保護者研修会を実施し、情報提供を行う。 (4) ・国や大学の動向を的確に把握し、情報提供に努める。 ・進学指導重点校事業を活用し、難関大学受験をサポートする。	(1) ・生徒・保護者対象アンケートの分析 ・進路実績、実力テスト・外部模試の結果分析 (2) ・生徒対象アンケートの分析 ・進路実績、実力テスト・外部模試の結果分析 (3) 生徒・保護者対象アンケートの分析 (4) ・生徒対象アンケートの分析 ・進路実績	(1) 「キャリアパスポート」は定期考査ごとに記入できており、状況は概ね良好である。「ポートフォリオ」は「classi」に集約し、講演会の感想や記録、アンケートの回答記録なども蓄積することができた。 (2) ・系統別進学説明会、大学出前講座を実施し、生徒アンケートの結果が良好であった。 ・全学年において夏季補習を実施し、3年生は土曜講座も実施した。また2年生の集中学習会も実施することができ、生徒アンケートでも高い評価を得た。 ・実力テストや外部模試の結果を分析し、学年団と共有することができた。 (3) 進路講演会、保護者研修会、学年集会を行い、情報提供を行った。対面で実施できない時はオンラインやオンデマンドも活用し、情報提供に努めることができた。 (4) 夏季・冬季の難関大入試対策講座を実施し、生徒アンケートの結果が高評価であった。	A A B A	(1) 「classi」を活用し生徒と保護者、教員で情報を共有できた。〇 (2) ・模試の分析・活用を進めることができた。〇 ・多くの生徒が補習や学習会を積極的に活用できた。〇 ・学習支援員が補充されたため、学習室延長をスムーズに実施できた。〇 ・生徒が文理選択を行う際の情報提供（量・タイミング等）に改善の余地がある。▲ (3) ・コロナ禍の現状で、オンライン等を活用してできることを模索して実施できた。〇 ・１、２年生の保護者への情報提供を充実させる必要がある。▲ (4) 難関大志望者への支援を行い、意識向上に努めることができた。〇	A
生徒指導	(1) ・岐阜北高生としての自覚と誇りを育成する。そのために、集会等での話、「生徒指導だより」や「生徒指導部機関紙KASHIWA」等を通じて、倫理観や規範意識に基づく社会性・人権感覚を育む。 (2) ・社会通念上の必要性、人格的自律、法的責任を必要最低限の基準とし、自ら判断し、場にふさわしい行動がとれる生徒を育成する。そのために、生徒が自ら学校をよりよくするための課題などを見いだし、その解決法などについての合意形成を図り、協力して目標を達成していく姿勢を育む。 ・生徒指導部職員、生活委員会、MSLの生徒による忠節橋北交差点、早田大通り交差点、ぎふ清流中学校北側道路での交通安全指導を実施する。 ・関係諸機関との連携を図り、特に１年生に向けて初期指導の充実させるとともに、ハザードマップの作成や「生徒指導だより」や「生徒指導部機関紙KASHIWA」等による交通事故防止啓発活動を実施する。	(1) ①特別指導の発生件数の増減 ②イエローカードの発行枚数の増減 ③啓発につながる機関紙の発行回数 (2) ①交通事故・交通違反の件数の増減 ②街頭指導の回数 ③発生防止につながる機関紙の発行回数	(1) ①特別指導の発生件数 1件（R2, 3件） ②イエローカードの発行枚数 17件【内訳 3年7件,2年8件,1年2件】 ③啓発につながる機関紙の発行回数 9回 (2) ①交通事故・交通違反の件数 17件（R2, 19件） ②街頭指導の回数 5回（R2,3回） ③発生防止につながる機関紙の発行回数 4回	B B	(1) 件数は減っているが、事案の性質に大きな変化があった。SSWの派遣申請、ケース会議を開催したことでその生徒に携わる教員間で情報共有し、指導を一本化することができた。今後も可能な限り、専門家を要請し実情に則した対応をしていきたい。 ②来年度、やや形骸化気味な月2回の身だしなみ指導をやめ、イエローカード利用した全校体制での指導法に切り替える。この大幅な転換に関しては心配事もあるが、現存のシステムを見直し運用していきたい。 ③長期休暇前の刊行物について、保護者宛と生徒向けに内容を分けて発行した。 (2) ①登校時が圧倒的に多い。幸いにもすべて軽傷であったが、時間にゆとりをもった行動を促す指導の必要がある。 ②受動的な活動（外部からの依頼や定期的な活動）だけでなく、外部からの苦情に対して自発的に街頭指導ができたことが大きな成果。	B

	(3) ・専門の講師による啓発活動を実施する。特に１年生に向けて初期指導の充実を図る。 ・情報科教諭と協働し、SNS上での個人情報の扱いなど自他の安全に留意させる。 (4) ・学年会、企画委員会、職員会議などでの情報交換を通じて、生徒把握・情報の共有に努める。 ・「生徒指導だより」の定期的な発行や集会等での講話により、多様な考え方や特性を認め、他者を尊重する資質が身に付くよう指導を続ける。 (5) ・担任だけで抱え込むことがないように、学年主任を中心とした学年会・教育相談係・養護教諭等、組織的な支援を強化する。 ・クレペリン検査、i-check検査、の分析結果から現状を把握したり、教育相談に関する校内研修、総合教育センター等の研修を奨励し、教員の資質向上を図る。	(3) ①情報モラル違反の発生件数の増減 ②発生防止につながる講演等の回数 (4) いじめの認知件数の増減と内容の精査 (5) ①教育相談室の利用頻度 ②SC及びスペシャリストサポート事業の件数 ③教育相談につながる機関紙の発行回数	(3) ①情報モラル違反の発生件数の増減 0件（R2, 2件） ②発生防止につながる講演等の回数 2回（R2,2回） (4) いじめの認知件数 2件 ※いずれも解消済みで、重大事案には至らず（R2,15件） (5) ②SC 20時間（R2 20時間）, SP依頼10回 20時間（R2 依頼8回16時間）※要望に対して100%対応できている ③教育相談につながる機関紙の発行回数　6回	A B B	(3) ①昨年度のような大きな事案の発生がなかった。 (4) 重大事案はなかった。認知件数2件についても、関係者で迅速に対応することができた。「いじめ」に関する対応フローを作成し、HP上でも公開している。 (5) ①②について、悩みを抱える生徒やその保護者と、面談や電話での相談に応じ、精神面でのサポートができた。保護者のカウンセリング希望件数が増加傾向にある。保護者との連携をより保ち、相談活動に努めていきたい。 ・SCによる研修について、例年職員向けで実施していた。今年度はそれに加え、生徒向けに「SOSの出し方教育」についても実施した。 ・「アンケートや調査の回数が多い」と反省事項であがっている。しかし、不安を抱えている生徒を把握するためには必要である。実際、悩み事を把握し、生徒を相談へ導く、必要に応じてカウンセリングを実施することができた。	
特別活動	(1) ・HR活動を通してお互いに理解し合い、協調性を育て、自己の生き方を考えさせる。 ・集団や社会の一員としての自覚を深め、人間関係を密にして健全な生活態度を養う (2) 自らの興味・関心に従い部活動に意欲的に参加することにより、自己の可能性にチャレンジするとともに、学年を越えた人間関係を構築し、自主性・社会性を育成する。	(1) ・北高祭や球技大会において、生徒が自主的・自発的に企画・立案・運営できたか。 ・生徒が委員会活動や学校行事に自主的に参加して、満足感・達成感を得られたか。 (2) 部活動に積極的に参加し活動できたか。	(1) ・コロナ禍でクラスでの活動が制限されたが、文化祭や球技大会において、どのクラスもクラス一丸となって取り組み、盛り上がることができた。 ・いろいろな行事が中止または変更されたが、創意工夫し活動を続けることができた。 ・環境衛生活動優良校として3年連続で表彰された。 (2) 部活動加入率は88%。コロナ禍において大会や活動が制限された中で、感染症予防対策に務めながらも、今できることを考え、どの部も前向きな活動ができた。	A A	(1) ・生徒会活動や部活動における生徒同士の協力により、コミュニケーション能力が育成された。○ ・生徒は強い意志と、広い視野を身に付けることができ、大きな成就感を得ることができた。○ ・今後の課題として、熱中症や感染症、台風などの災害への対応を考え、行事の開催方法や開催時期の検討が必要である。▲ (2) ・活動を制限された中で、目標を達成するために創意工夫をこらして取り組むことができた。○ ・部活動において、ルールの遵守が曖昧になってきている。下校時刻、自主練習など規則を見直し、活動を盛り上げたい。▲	A
保健管理・安全管理	(1) 定期健康診断や保健行事等を通じて健康管理についての意識を高める。 ・定期健康診断の事後指導を工夫し、受診行動に繋げる。 ・個別指導の充実を図る。特に歯科・視力 (2) 環境衛生活動の充実 ・定期点検や日常点検の結果を改善につなげ、より良い環境になるようにはたらきかける。 ・生徒委員会活動を通して、自分たちの学習環境に関心をもたせ、より良い環境作りを目指した活 (3) 事故や感染症への対策の充実（職員の危機管理意識の向上） ・事故などの危機管理に関する職員研修の充実を図る（緊急時の対応、食物アレルギー対応、熱中症対応など）。 ・生徒向けの防災に関する講話やＬＨＲテーマを設定し、防災教育を進める。 (4) 環境衛生活動とともに、校内の安全を日常的に行う意識を高める。 ・新型コロナウイルス感染症の予防対策の徹底と継続を図る。 ・掃除監督による日常安全点検を徹底し速やかに修繕を終えるようにする。	(1) 定期健康診断後の受診率の向上に繋がったか。また、健康管理についての意識の変容に繋がったか。 (2) 学校薬剤師と連携して、環境衛生の定期検査と日常点検の結果を、環境づくりに繋げることができたか。 (3) ・事故発生時の救急体制や、食物アレルギー対応の徹底を図るとともに、情報を共有して事故防止に努めることができたか。 ・けがや感染症の拡大を防ぐために早期対応や予防の意識を高めることができたか。 (4) ・新型コロナウイルス感染防止対策が的確に行えたか。 ・掃除監督者による日常的な安全確認がおこなえたか。 ・修繕が必要な場合は速やかに修繕が行えたか。	(1) ・定期健康診断は予定通り実施でき、事後指導も９月の登校できなかった期間があった割には効果的に行えた。そのため受診率も昨年度より大きく上回り、特に歯科と視力については、６０%以上の受診率となった。 ・保健行事はコロナ禍の影響で予定通り実施できなかったものもあったが、「保健だより」やその都度タイムリーに資料を作り啓発を行った。 ・熱中症については重症者はでなかった。オンライン授業開けには部活動や体育授業で体調不良を訴える生徒はいた。 (2) ・学校薬剤師との連携を強化し、環境衛生活動の指導助言を受けて、できる限りの改善を進めることができた。 ・新型コロナウイルス感染症予防推進についても、学校薬剤師に数々の指導をいただき、科学的 (3) ・職員救急法講習会や食物アレルギー対応（エピペン）のシミュレーション講習が実施できた。 ・改定マニュアルの周知は研修会を通してできたが、さらに踏み込んだ内容にしていく必要性を感じている。 (4) ・新型コロナウイルス感染症予防については、気のゆるみが生じた場合には細目に職員や生徒に対して啓発を推進し、予防に努めた。 ・各部屋にＣＯ²モニターを設置し、冬季の換気対策に功を奏した。 ・定期的な校内安全点検に加え、日常的な点検も実施し、修繕願いにより速やかに対応できた。	B A A A	(1) 学校保健計画や保健室経営計画に基づいて、常に課題を持ちながらコロナ禍の中でできる範囲で意欲的に保健管理や保健指導に取り組むことができた。○ (2) 生徒委員会活動の活性化も図り、環境衛生活動の更なる向上ができた。その成果もあって『学校環境衛生活動優良校』の表彰を４年連続で受けた。学校薬剤師との連携も十分にできた。○ (3) ・実際の救急要請を行った時には、迅速で的確な対応ができていて、講習会の成果を感じた。○ ・防災に関する職員研修会の持ち方についても、非常時に対応できるかという懸念があり、実施方法を考えていきたい。▲ (4) ・啓発活動や防止対策は職員の協力のもと効果的に実施できた。○ ・校内安全点検と修繕については、効率よく進めることができ、速やかに改善や修繕ができた。○	A

図書	(1) ・各教科と連携を密にし、学年の特質に応じた読書指導・図書館の活用を行う。（各クラスのLHRを活用した読書、各教科の授業での図書館の活用など） ・１年生入学当初に実施する図書オリエンテーションを有効活用し、情報の探し方・資料の使い方を周知させる。	(1) ・各クラスのLHRを活用した読書、各教科の授業での図書館の活用ができたか。 ・図書オリエンテーションを行い、情報の探し方・資料の使い方を周知させることができたか。	(1) ・一部のクラス、教科ではLHRを活用した読書、授業での図書館の活用がよくできた。 ・充実した図書オリエンテーションを行うことができたので、1年生の図書館の活用が増加した。	A	(1) ・一部教科では授業での図書館の活用がよくできたが、教科によっては活用がまだまだ少ないので、アピールしていきたい。▲ ・探究や進路関係など、必要な情報を探しに来る生徒の相談に乗って資料を紹介したり、県図書館等から借り受けて資料を提供したりすることができた。○	A
	(2) 「読書感想文の書き方」についての資料や過去の優秀作品を提示する。	(2) 読書感想文の書き方を提示し、感想文コンクールを推進することができたか。	(2) 1年国語科と連携し、読書感想文の書き方の指導から本選びのアドバイスまで授業内で実施することができ、県での感想文コンクールにも受賞者を出すことができた。	A	(2) ・読書感想文を1，2年生全員に課すことによって、読書に対する興味を促すことができたと同時に、読書に興味を持ってもらう活動によって読書感想文の活性化もできた。現行の方法を今後も続けていきたい。○ ・感想文の審査について得点のつけ方など、今後もさらに工夫が必要である。▲	
	(3) 図書委員が企画・運営する活動を充実させる。（日常的および読書週間、文化祭など）	(3) 図書委員が企画・運営する活動を充実させることができたか。	(3) 読書週間については活動できたが、文化祭が中止となり、図書委員の自主的活動が制限された。	B	(3) 図書委員の日々の活動は大変よくできているが、コロナ禍のため自主的活動をする機会が減ったので、次年度は充実していきたい。▲	
渉外	(1) ・会関連行事への多数の参加を得るために、会員に対して積極的な参加を呼びかけ、保護者と学校の連携強化に努める。 ・保護者研修会は、オンライン配信も併用する。	(1) ・会関連行事の開催を、会員に対して適切な時期に発信できたか。 ・保護者研修会を、オンライン配信を併用して実施できたか。	(1) ・会関連行事の開催を、文書とすぐメールを併用して発信できた。 ・保護者研修会は、コロナウイルス感染対策のため、学校に集まっていただくことはできなかった。オンデマンド配信は実施できた。昨年度は配信時間を限ったオンライン方式だったが，今年は保護者が自分の都合の良い時間に視聴できるようにしたので、より多くの方に進路指導や生徒指導などに関する情報を届けることができた。	A	(1) ・会関連行事の発信　○ ・保護者研修会　○	A
	(2) ・会員が積極的に発言し、意見交換できる機会を増やし、会活動の一層の充実・進展を図る。 ・会報の発行やＨＰ公開等の広報活動・情報公開の他、学校が発行する様々な資料を役員や保護者に積極的に提供し、本校の教育方針や本会の活動への関心・理解を一層深め、強い信頼関係の下で積極的な支援を得る。	(2) ・会員からの意見をくみ上げることができたか。 ・会報を定期的に発行できたか。	(2) ・会員からの意見は、学年委員（各クラス２名の代表者）から、文書でくみ上げることができた。そのほかの保護者からは、例年ならば学校内で行事を実施したときに意見集約をしていたのだが，今年はそれはできなかった。 ・学校祭をはじめとして学校行事が少ない中であったが、会報を定期的に発行し続けることができた。	B	(2) ・意見の集約　▲ ・会報の発行、広報　○	
カリキュラムデザイン	(1) 授業改善の意識の浸透のため、全職員による相互参観、授業アンケートの実施	(1) 授業相互参観の実施状況はどうか、生徒による授業アンケート	(1) ・コロナにより、授業相互参観は不実施としたが、生徒によるアンケートは実施することができた。 ・量的な調査を実施し、６月・１１月で数値を比較した結果、地域・国際への興味関心、探究の手法への理解が有意に高まった。	B	(1) ・探究学習に関して、コロナにより外部連携が制限されたが、やれる範囲で、探究学習を充実させることができた。○ ・授業相互参観について、実施できなかった。▲	A
	(2) 探究学習の実施（「総合的な探究の時間」、「社会と情報」の時間を使い、本事業を計画、実施）	(2) 生徒へのアンケート調査	(2) 本年度は外部との連携が困難であったため、文献調査を中心として、１年生は地域課題、２年生は国際的課題に取り組んだ。生徒からは多くの収穫があったという好意的な感想が多く寄せられた。	A	(2) 生徒への質的、量的調査により良好な結果が出てきた。○	
	(3) 探究学習実現のための職員研修の実施	(3) 職員研修の実施実績と職員へのアンケート調査	(3) 田村学氏による探究に関する勉強会（７月）	A	(3) 授業アンケートについては２回実施できた。○	
	(4) 新カリキュラム作成	(4) 北高ポリシーに沿ったカリキュラムができたかどうか	(4) カリキュラム委員を通しカリキュラムを完成させることができた。	A	(4) カリキュラムについてスクールポリシーを反映したものを完成させることができた。○	

11　取組状況・実践内容　　評価項目の達成状況等	12　来年度に向けての改善方策案
(1) 進学重視の北高において、自らに高い評価を下せない生徒に寄り添う教育をしてほしい。偏差値や点数だけで人の価値を決めることなく生徒を育成してほしい。学校の抱える課題について分析し、少しでも理想に近づくように進めていってほしい。	(1) スクール・ポリシーを踏まえ、生徒の全人的な育成を目指して、各種学校行事等の教育活動の目的を明確にし、3年間を見通した教育計画を策定する。
(2) 難関大学・国公立大学合格に重点を置くことも大切だが、その先も見据えた大学選びが大切だと思う。海外の大学へのチャレンジがあっても良い。学部や教授などの専門性で選べる進路情報の提供や、大学院を視野にいれた進路指導を考える必要がある。	(2) ICTも活用しながら対話的で深い学びとなるよう各教科の授業改善を図るとともに、それぞれの生徒の進路目標や学習の到達度に応じて、習熟度別授業や学校設定科目、個別の学習支援や進路指導により、個別最適化を図る。
(3) 社会が大きく変わりつつあることをしっかりと認識し、大人たちが経験したことのない社会をこれからは生き抜いていかなければならないことを理解して指導してほしい。	(3) 令和4年度から1年生に導入する「総合的な探究の時間」等を利用し、岐阜青年会議所等と連携した岐阜市への政策提言、JAICA等と連携した国際的な課題解決の研究、行政が取り組む政策への参画など、県教委指定「地域共創フラグシップハイスクール事業」を有効活用し、生徒に様々な体験や挑戦の機会を提供していく。
(4) 生徒自身が考えて決定する力を身に付けることが大切である。校則などの規制をなくすということではなく、生徒自らが選択でき、考えて学校生活を送ることが大切であり、それに対して支援してくれる学校や先生方の姿を評価したい。	(4) 学校は生徒一人一人の自己実現を図るための学びの場であるとともに民主的な集団生活の場であり、生徒同士が活発に議論し、意見交換ができる場となるよう既存の生徒組織である生徒議会や各種委員会の活性化を図る。
(5) 感染予防のため換気が必要であり、暖房の効果を心配したが、適切に温度調節がされていた。新型コロナ感染症の予防によく取り組んでいると思う。生徒の心身の安全安心のために、今後も引き続き、生徒一人一人にあった対応をお願いしたい。	(5) 引き続き感染防止に努めるとともに、「命を守る訓練」等により大規模災害に備え、「いじめ迷惑調査」や「心のアンケート」、カウンセリングの充実により、生徒一人一人の悩みに寄り添える校内体制をつくる。